

「家がいいね」 第41号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2007.10.12

朝焼け小焼けだ

大漁だ

大羽鯛（おおばいわし）の

大漁だ。

浜は祭りの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鯛（いわし）のとむらい
するだろう



大正13年「大漁」 金子みすゞ 21歳

正直この詩を見て驚きました。豊かな生活をもたらす大漁の喜びに、当然ながら漁港の人達は心が弾み、早朝から祭り同様の興奮です。しかし、みすゞさんの視点は優しく哀しく生死反転します。広く深い海の中に、仲間の命をもぎ取られた嗚咽の渦巻を聞いています。誰が喜びの最中に、生きとし生けるものの哀しみに気が付くでしょうか。みすゞさんは、「弱みから見えるもの」に何時も寄り添うように言葉を与えました。ひとつひとつの小さなものが繋がりあうために、言葉が必要なのです。それは、人以外のものへも注がれました。大漁は「次はもっと大漁」に膨らみ軋みます。多くを得るために、人は区別し差別をし、結果として互いを分断します。みすゞさんの生き方も、好まぬ結婚と病気に追いやられ、愛娘と引き裂かれる前夜に自ら26歳で命を絶ちました。そんな経緯を知らずとも、みすゞさんの詩は愛されます。詩の言葉が繋げてくれるのでしょうか。

「終わりよければすべてよし」伊勢で上映を！

みえ生と死を考える市民の会が津市で主催した10月6日の上映会と「おしやべり会」を終えて考えました。2時間の映画は問いかけの形です。在宅で過ごす患者の表情はどうですか？ 豪州では、がんを抱えても生活を続けている安定感が伝わってきます。日本では表情が厳しい。直前まで

病院で「がん治療」に必死だったのでしょうか。家族も「せめてあと10年、5年、いや1年で」と訴える形です。命に対する余裕の差が明白です。豪州などでは、病院・緩和ケア・在宅が何時でも何処でも受けられる連携があります。病院で死ぬのが当然になった今の日本。代償だった過剰な医療も、今後は「ここまで」と中止勧告される傾向です。でも法律や制度を問う以前に、私達の「生きる意味」は個々に考えなければならぬのです。地域のお互いの生活の中で、最後までこの家で本当に暮らすためにどうしたらいいのか？伊勢市でも、自主上映会を企画し考えましょう。発起を次のように始めます。

10月26日（金）

18時～20時

伊勢市・外宮前

いせ市民活動センター

―南館2階で

まずはお集まりを。

正直者が馬鹿を見ない世の中は「ご」に

賞味期限の付け直しの企業が問題になった時に、「今日中にお食べ下さい」と明記した、伊勢の餅ならこんな事はないのにと誰かが言った。その前提から、ひっくり返った。

残ったあの餅を家の冷蔵庫に入れて、次に食べる時は済まないような気持ちだったのに。この白い曼珠沙華を見ながら、経営者の言い訳を聞いて、こちらが真っ赤にならないように願うばかりです。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805

三重県伊勢市御薮町高向 927

電話 0596-20-8104

ファクス 0596-20-8105

mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp

<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>